

**「平成13・14年度帰国・外国人児童生徒と共に進める教育の国際化推進地域」
最終報告書**

千葉県船橋市

帰国・外国人児童生徒と共に進める教育の国際化推進地域の概要

1 平成14年9月1日現在の推進地域内の以下の児童生徒数

	公立小学校		公立中学校		合 計	
	人数	校数	人数	校数	人数	校数
海外帰国児童生徒在籍（海外に1年以上在留し帰国後3年以内）数	257	48	53	21	310	69
中国等帰国児童生徒在籍数	0	0	0	0	0	0
日本語指導が必要な外国人児童生徒在籍数	51	18	31	13	82	31
地域内の全児童生徒在籍数	27,853	55	12,687	27	40,540	82

2 帰国・外国人児童生徒の実態（学校生活への適応状況、日本語能力の程度等）

平成14年度においては、特に、中国籍の外国人児童生徒の編入が多く、平成15年3月20日までに16人が編入した。その他、フィリピン籍5人、ペルー籍4人、パキスタン籍2人、ブラジル籍2人、韓国籍2人、米国籍・台湾籍・ウクライナ籍・ベトナム籍・インド籍各1人、合計36人の編入があった。

学務課での編入の手続きの際、指導課と連携をとりながら、指導課担当者が教育相談カードを基に保護者及び児童生徒と面談の上、家庭環境、健康状況、母国での履修状況、日本語習得状況等を確認し、学校の受け入れを支援している。全く日本語が話せない児童生徒がいるため、学齢相当の学年に編入することが難しい場合もある。指導課に所属している日本語指導員も多くの児童生徒を援助しており、学校からの要望に応じきれないのが現状である。通訳ボランティアの方々や国際化推進コーディネーターの協力を得てできる限りの支援を行っている。

児童生徒の個々の適応能力には当然違いがあるため、日本語をすぐに覚えてしまう児童生徒もいれば、不登校に陥ってしまう児童生徒もいる。

帰国・外国人児童生徒と共に進める教育の国際化推進地域センター校の概要

1 センター校

学 校 名	船橋市立葛飾小学校
校 長 名	古屋 和雄
所 在 地	千葉県船橋市印内1-2-1
学校規模	34学級・児童数1,118名・平成14年度創立110周年
電話番号	047-431-2722
FAX番号	047-431-2723
ホームページ	
アクセス	JR西船橋駅から徒歩8分または京成西船駅から徒歩3分
学 校 名	船橋市立葛飾中学校
校 長 名	内田 衛
所 在 地	千葉県船橋市印内1-5-1
学校規模	22学級・生徒数823名
電話番号	047-431-2692
FAX番号	047-431-0275
ホームページ	
アクセス	JR西船橋駅から徒歩10分または京成西船駅から徒歩5分

帰国・外国人児童生徒と共に進める教育の国際化推進体制の整備

1 船橋市の国際化に対応する教育国際化推進協議会の概要

(1) 構成員

船橋市の国際化に対応する教育国際化推進協議会 事業の基本的方向の策定	
会 長	：教育長
副 会 長	：学校教育部長
委 員	：学務課主幹（1名）・センター校校長（2名）・協力校校長（6名）・ 秘書課国際交流室長・船橋市国際交流協会会長
事務局 長	：指導課長 （事務局：学校教育部指導課）

教育国際化推進委員会 企画・運営	
各委員会運営委員	：小・中学校教諭（13名）・秘書課国際交流室（1名）・PTA会長等（3名）
事務局員	：指導課指導主事（3名）

各 委 員 会 実践研究			
教育実践 委員会	国際交流 委員会	適応指導 委員会	地域社会国際化 委員会
（センター校全教員・各学校担当教員・各関係機関等代表）			

平成14年度の具体的な取組内容とその成果等について

1 研究主題 『国際性豊かな児童生徒の育成』

(1) 主題の趣旨及び設定の理由

「国際人としての生きる力を培う」ことをねらいとして、上記研究主題を設定した。

(2) 期待される資質や能力

ア	地球市民としての自覚や実践的態度
イ	自国の文化を尊重する精神と多様な文化を受容できる広い視野と調和のとれた態度
ウ	自ら課題を見つけ解決する能力や態度
エ	地球的な問題を解決するための国際協調精神
オ	相互理解のための英語によるコミュニケーション能力と積極的な態度
カ	世界の人々との交信を図るコンピュータ活用能力と積極的な態度

2 研究主題に関連した活動及びその成果

【各委員会による実践研究】

委 員 会 名	実 践 研 究
教育実践委員会	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校英語活動カリキュラム作成等 ・小学校における英語活動の推進 ・海外体験を生かした授業の推進 ・様々な国際理解教育の実践
国際交流委員会	<ul style="list-style-type: none"> ・国際交流の仕方について調査研究 ・姉妹校・友好校等との人的交流及び作品の交流 ・ALT や地域の外国人等との交流活動 ・事例研究
適応指導委員会	<ul style="list-style-type: none"> ・学校発文書集スペイン語版の作成 ・すぐ使用できるワークブックの作成 ・異文化理解体験事例集の作成 ・日本語指導法の実践研究 ・学習及び生活適応の研究
地域社会国際化委員会	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の外国人との交流事例等の情報発信 ・福祉施設等との連携による国際理解教育の実践 ・地域在住外国人との国際交流活動

	<ul style="list-style-type: none"> ・学校便りやPTA 広報等による広報活動 ・人材リスト(帰国・外国人ゲストティーチャー)の作成
--	------------------------------------------------------------------------------------------------------------

【センター校・協力校による授業研究】

センター校 公開研究発表会	葛飾小学校	全学年授業展開
	葛飾中学校	全学年授業展開
協力校(6校) 第2回各委員会 授業研究	小栗原小学校	2年5組「リズムに乗ってあそぼう」 4年2組「外国の先生を迎えよう」 6年1,2,3,4組「はばたけ世界へ」
	宮本小学校	3年3組「熱烈歓迎!ぼくのふるさとじまん」
	習志野台第一 小学校	4年2組「メキシコ料理を作って、食べて、 メキシコを知ろう!」
	七林小学校	1年4組「国際交流って何」 ～西安の体験談を聞こう～
	船橋中学校	3年6組「世界に羽ばたけ船中生!」 ～市立船橋高校生徒との交流を通して～
	市立船橋 高等学校	報告 「市立船橋高校における国際交流のあゆみ」

【教育実践委員会における実践の概要及び成果】

(1) 実践の概要

ア 小学校英語教育

異文化にふれるという目的で英語体験学習が始められた。あくまで英語に親しみ、外国人やその習慣にふれることを中心に行われている。派遣されるALTに指導内容が任されているのが現状で、担任と一緒に授業に参加するものの本来のTTではなくなっている。遊びながら親しむ、慣れるという点ではそれでもよいと思うが、学校が授業として扱う以上、担任との連携や計画も必要になってくるのではないか。この点で担任とALTの連携がとれている学校や内容的に児童に興味を持たせる取り組みをしている学校の指導計画を紹介し、将来英語教育が導入される小学校へ一つの提示をすることにした。

イ 自国文化の尊重をねらいとした授業実践

文化の違いを乗り越えて相互理解や交流を図るためには、相手方のことを知ることはもちろん、自分自身のこと認識し、その良さを知らせることが大切である。外国のことを学習することは、日本のことも合わせて学習していることを忘れてはいけないだろう。この中で、良い面も理解しがたい面も出てくるが、それを単に比較し、どちらがよいかで済ませてしまっては国際理解も人間理解もあり得ない。優越感や劣等感を抱かせない指導が大事ではないだろうか。

小学校では、生活科「まつり」をとおして地域の人やお世話になった方々を迎え、どのように交流していくのかを考えさせる事例を、中学校では、「国際協力」ユニセフ募金を取り上げた。小学校低学年で交流の輪が友だちから地域社会へと少しずつ広がり、中学校では交流の輪が日本から世界へと、年齢に応じた題材設定が必要である。また、子どもたちの身近にある興味関心のもてる事項を取り上げることが大切である。

ウ 交流活動(校内で・学校間で・外国で)

「共生」という言葉があるが本委員会では、それを「たった一つの星の上に生活する人類も動物も植物も仲良くそれぞれの立場を理解し、助け合っている」と捉えている。

国際理解教育の中でこの「共生」を指導するにあたって良い実践を行っている学校を紹介する。

本市は、姉妹都市や友好都市と小・中・高校生による人的交流を図ってきている。昨年度は市内40名の中学生を友好都市西安市に派遣し交流をしてきた。交流に至るまでの計画から現地での交流、帰国してからの報告会まで実際に参加する生徒だけでなく学年、学校全体

学校間へとこの学習の輪が大きく広がっていった。さらには、姉妹都市との交流を行っている高等学校の様子を聞く機会を設け、外国への興味関心が大きく育っている。実際に現地で交流を図った中学生は外国人と接し、同じ土俵の上で語り合うことができたのではないかと。違いを違いとして捉え、理解し合う一歩を踏み出したのではないだろうか。

エ 実践報告

平成 13 年度に提出された報告書の中から下記の学校を紹介する。

- ・二和小学校は、英語教育の取り組み方と第 1 学年年間指導計画を掲載した。ALT とのふれ合いをとおして英語に慣れ親しむ、異文化体験を目標とした。
- ・船橋中学校は、西安市との国際交流活動に学年で取り組み、生徒だけでなく教師も国際理解教育の意義を再確認することができた。
- ・宮本中学校は、ボランティア活動とユニセフ募金活動を生徒会の活動として取り上げ、「国際協力」をテーマとして授業を行った。
- ・法典小学校は、生活科の「お祭り」をとおして自国文化の理解と地域の人たちと交流するための方法を考え活動してきた。
- ・習志野台中学校は、海外体験を生かした英語科の授業で習慣や価値観の違いを尊重しながら理解を深めた。

(2) 成果

- ・教育実践をとおして国際理解を図ることを目的にした本委員会では、実践の内容を絞らずに各学校が目指してきた実践を集約分類し、問題点を明らかにしてきた。その中で、今後の指導に役立つ実践例を紹介することができた。実践報告では、各学校が独自性を出しながら主題に迫ろうとしている様子がよく分かった。中でも、中学校での交流活動は学級、学年、学校間、中・高、海外と国際交流の輪がしっかりと、確実に広がっていく様子を読み取ることができた。海外へ派遣される生徒だけでなく他の生徒も自分の問題として国際交流を経験することができた。
- ・小学校でも英語教育の導入に合わせ、ALT と一緒に年間指導計画を立案したり、ひと味違う工夫をして英語に興味を持たせ、日常生活の中に取り入れようとしたりするなど多くの報告が出された。

3 推進地域としての取組及びその成果

【国際交流委員会における実践の概要及び成果】

(1) 実践の概要

ア 中国・西安市への中学生派遣事業

本研究の初年度であった昨年は、まず市内全中学校の 1 年生合計 40 名を中国・西安市へ派遣して国際交流を実施した。これは、市の国際化推進事業の一環であり、平成 6 年に船橋市と西安市が友好都市として調印して以来行われている数々の交流事業の 1 つでもある。しかし、今回の派遣事業は、中学生 40 名と教育委員会関係、PTA 関係等総勢 50 名の教育友好使節団ということで規模も大きく、友好学校である大雁塔小学校、育才中学校、第八十五中学校の 3 校の生徒と交流し、さらに育才中学校では、生徒の自宅で昼食をご馳走になるというショートホームステイを実現させるなど新しい試みも多くなされた。

事前の調べ学習、個人テーマ設定、テーマに迫る質問の作成と指導課日本語指導員による質問の中国語訳、現地での実際の交流、そして帰国後の各学校での報告会など交流のしかたの一例を示すことができた。

イ 西安市と船橋市の児童生徒の作品交流

平成 7 年に市場小学校、船橋中学校、市立船橋高等学校の 3 校が西安市の 3 つの小・中学校との友好学校締結を記念し、作品交流が始まった。これまでに 5 回、両市 6 校間の児童生徒の作品が交換され、それぞれの学校で展示されている。

今回は、本研究がスタートしたこともあり、友好校 3 校のほかにも国際交流委員会の委員が所属する小・中・高校 23 校の児童生徒の作品も西安市へ送ることにした。また、西安市から送られてくる作品も、出品した市内の小・中・高校全てに割り当て、相互作品交流となるようにし、交流

の輪が広がることを目指した。

ウ 市立船橋高等学校の国際交流

市立船橋高等学校は、今回の「教育国際化推進地域」の研究がスタートした昨年度から国際化推進協力校となり、国際交流実践を中心に長年の指導のノウハウや成果を公開することにより、研究の一端を担うことになった。

同高校が、本格的に国際交流を始めたのは今から 14 年前の平成元年である。船橋市がカリフォルニア州ハイワード市と姉妹都市提携をしたことに伴い、同市の私立モロー高校と姉妹校提携をし、交換留学制度をスタートさせた。モロー高校とはこれまで夏季短期留学、スポーツ交流、文化交流などを行ってきた。

平成 6 年からは、同校普通科の中に留学教育コースを設置し、その教育の一環としてオーストラリア短期語学研修を実施し、実際に高校生活を体験し、現地の高校生とも自然な交流をしている。平成 7 年からは、西安市の第八十五中学校（高校）との友好学校提携を機に、西安市からの生徒の来校、市立船橋高等学校生徒の西安市派遣、陸上長距離部の西安城壁マラソン参加、文化交流などを行っている。

これら過去から現在までの国際交流の記録をまとめることにより、今後の国際交流活動の参考になるようにした。

エ 船橋市の国際交流

今回の研究には、船橋市秘書課国際交流室が加わり、船橋市の国際交流事業や市民レベルの国際交流の紹介など多くの情報を提供し、行政面から教育国際化の推進を担っている。

第一次指定の平成 13・14 年度は、国際交流室の事業内容を知らせることで、各学校での実践に協力できることを明らかにし、各校がさらに多くの実践をしていけるようにした。

オ 市内各校のレポートから

平成 13 年度の第 2 回各委員会は、各委員会とも自校での実践レポートを事前に提出して研究協議を行うものであった。国際交流委員会では、実践レポートのうち特に国際交流に関する内容のものを中心に実践上の課題や留意事項等について話し合った。以下実践例を紹介する。

題 材 名	教科・領域・総合	学 校 名
カナダの友だちを迎えよう	特別活動	市場小学校
外国とふれあおう	総合的な学習の時間	薬円台南小学校
「世界がもし 100 人の村人だったら」	英語	御滝中学校
ボランティア活動	総合的な学習の時間	古和釜中学校

(2) 成果

- ・西安市への中学生 40 名の派遣で、全市的な国際交流事業を行うことができ、在籍校が異なる生徒の事前・事後指導も含む交流実践例を示すことができた。
- ・西安市との作品交流においても多くの学校が参加でき、交流を広げることができた。
- ・高等学校や国際交流室が、本研究協議会に加わったことにより、研究内容に広がりや深みが増した。
- ・実践レポートから国際交流の実践が市内の小・中・高校で多く行われるようになってきていることが明らかになった。

4 帰国・外国人児童生徒とその他の児童生徒の相互啓発の観点による取組及びその成果

【適応指導委員会の実践と成果】

(1) 実践の概要

ア 平成 13 年度 第 2 回適応指導委員会での実践報告

各学校における帰国・外国人児童生徒の適応状況と指導状況についてレポートを作成し、それをもとに実践の分かち合いを行った。

実 践 報 告	学 校 名
外国人児童の適応指導を学校としてどのように進めたか	八木が谷小学校
外国人生徒の漢字指導、日本地理指導	行田中学校

イ 平成 14 年度 宮本小学校・習志野台第一小学校での授業研究

宮本小学校では、中国人児童生徒とその学級の児童生徒が互いの国の文化を紹介し合った。
習志野台第一小学校では、メキシコ人児童生徒とその保護者がメキシコ料理を紹介し、事後研究では、保護者を交えて協議を行った。

実践校	学年・組	教科・領域等	単元名	ねらい
宮本小学校	3年3組	総合的な学習の時間	「熱烈歓迎！ぼくのふるさとじまん」	自国の文化に関心や誇りを持ち、互いの違いや良さを認め合う。
習志野台第一小学校	4年2組	総合的な学習の時間	「メキシコ料理を作って、食べて、メキシコを知ろう！」	メキシコの料理作りをとおして、メキシコの料理や文化等について理解を深める。

ウ **学校発文書スペイン語訳**

英語訳、中国語訳、ポルトガル語訳に続き、近年増加しているスペイン語圏からの編入児童生徒の指導に対応できるようにした。

エ **日本語指導ワークシート集の作成**

前回作成したワークシート集に加え、さらに使いやすいワークシートを目指して作成した。ひらがな、カタカナの練習に役立つようにした。

オ **「子どもたち・教師が経験した異文化理解体験事例集」の作成**

文化の違いの中で、子どもたちをどう適応させていったか、教師自身が異文化や外国の人とふれ合って考えたことなどの体験事例を冊子にまとめた。

(2) 成果

- ・外国人児童生徒のための日本語ワークシート集を発行することにより、外国人児童生徒や保護者がよりスムーズに日本の生活に適應できるためのきめ細やかな手立てを講じることができた。
- ・学校発文書スペイン語訳を発行することにより、文書連絡が密に行われる日本の学校では、内容が理解できないと学校行事の様子が正確に伝わらない場面が多いので、スペイン語圏の保護者に対しても学校全体の行事を理解してもらえるようになった。
- ・市内小・中学校の先生方の異文化理解体験事例をまとめることにより、現在の問題を把握・分析することができた。このことにより、帰国・外国人児童生徒のいろいろな立場や状況をより具体的に理解することができた。
- ・市内2校で適応指導の授業実践をすることにより、総合的な学習の時間における外国人児童と共に学ぶ国際理解教育の単元開発及び進め方が明らかになってきた。また、事後研究では、保護者も交えて話し合いをすることができ、あらゆる方面からの問題解決へ深まりを持つことができた。

5 地域と連携した活動及びその効果

【地域社会国際化委員会の実践と成果】

(1) 実践の概要

ア 平成13年度 地域社会国際化委員会の委員20名で実践報告を行った後、地域社会国際化のねらいを共通理解した。

イ 市内小・中学校での「地域社会国際化」の実践の実状を把握するためにアンケート調査を実施した。

質問1	平成13年度に、学校だよりやPTA広報で国際理解教育の内容を発信したり、授業実践で地域の人と交流活動を行ったりしたことがありますか。	
回答 小学校	・PTA広報（英語教育・ALT紹介）	4校
	・学校だより（ALT紹介・国際理解教育）	3校
	・総合的な学習の時間の発信（参観・交流・発信）	3校
	・ゲストティーチャーとの交流	21校
回答 中学校	・生徒による新聞づくりの発信1校	1校
	・PTA広報（ALT紹介）1校	1校
質問2	平成13・14年度に貴校の実践がタウン紙やテレビで紹介されたことがありますか。	

回答 小学校	・地域のタウン紙（ワールドルーム紹介） ・小学生新聞など（英語クラブ・英語教育） ・千葉テレビ（ワールドルーム紹介）	1校 3校 1校
回答 中学校	・NHK 千葉（韓国の民話）	1校
質問3	平成14年度に学校だよりやPTA 広報で国際理解教育の内容を発信したり、授業実践で地域の人たちと交流活動したりする計画がありますか。	
回答 小学校	・PTA 広報（国際理解・英語教育） ・学校だより（国際理解） ・総合的な学習の時間（参観・交流） ・地域に向けて発信（授業実践） ・ゲストティーチャーとの交流	5校 3校 6校 1校 11校
回答 中学校	・PTA 広報など ・地域の雑誌 ・全校集会（保護者参加）	3校 1校 1校

考察

ゲストティーチャーを招いての国際理解教育はかなり多く実践されている。反対に自分たちが学習したことを地域に発信することはとても少ないことがわかる。学校だよりやPTA 広報には、時折掲載されるが、タウン紙やテレビなどのメディアに出ることはほとんどない。

スタートしたばかりの地域社会国際化は、これから実践を重ねていかなければならない分野である。これらの結果を今後の実践研究に生かしたい。

- ウ 市内小・中学校の帰国・外国人児童生徒の保護者にゲストティーチャーの人材登録をしてもらい、国際理解教育に関する人材ネットワーク化を図る。

内容

- ・市内小・中学校の帰国・外国人児童生徒に人材登録の趣旨を文書でお知らせし、賛同される保護者に登録してもらった。
- ・各学校では、登録者の名前、住所、電話番号を知っているが、人材リストには滞在、出身国、支援できる内容、帰国・外国人保護者、学校名のみが掲載されている。

人材リスト表の利用の仕方

- ・人材リスト表から、ゲストティーチャーを招聘したいときは、その学校に電話し、教頭先生または国際理解教育担当教諭にコンタクトをとる。
- ・話が具体的になったら、直接ゲストティーチャーと電話で話し合う。
- ・各学校で実践内容を記録しておく。
- ・各学校から提出された帰国・外国人ゲストティーチャー一覧表は2年間保管する。
- ・人材リスト表は2年ごとに更新する。

(2) 成果

- ・新しい方向性を目指した「地域社会国際化」のねらいや内容を理解し、事例をあげて研究することにより、理解が深まった。
- ・市内小・中学校のアンケートからこの分野が未開発であることがわかった。
- ・会員の中から出てきた要望を人材リストのネットワーク化という形でまとめることができ、国際理解教育の授業を支援する基盤ができた。